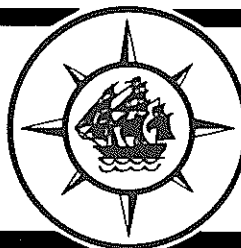


## Operation Raleigh News



Operation Raleigh

AD DENSO

No.10

昭和60年(1985)7月5日(金)  
毎月1回発行●発行所 オペレーション・ローリー日本委員会  
〒104 東京都中央区築地1-7-10 築地オーミビル502号  
電話 東京(03)544-7413

●このオペレーション・ローリーニュースは日本電装㈱のご協力で制作されたものです。

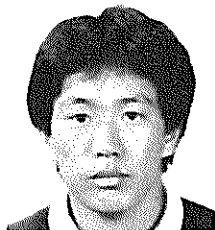
## 第7陣・8陣出発前インタビュー

「自分」を検証する旅へ  
ボリビア・ペルーへ6人が出発

1984年次オペレーション・ローリー日本代表第7陣として、ボリビアに向かった菊地孝範君、新保陽子さん(7月1日成田発JAL423便ロンドン経由)および第8陣として、ペルーへ向かう細田香納美さん、大塚洋君(7月9日成田発JAL423便ロンドン経由)の4人に出発前インタビューをしました。

——OR応募の動機は?

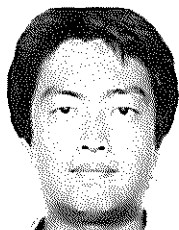
菊地 未知の世界に入り、いろいろな考え方をもって人々に接することで、自分を大きくしたいと思ったからです。



菊地君

新保 いまの大学生活にも満足しているが、4年間そのままでは困ると思いました。何かをやって、いままでの生活を変えるキッカケにしたかったからです。

大塚 大学時代に探検クラブに属していて、海外に行くことに抵抗がないこと、英語にも自信があり、費用が個人負担でないことも大きな理由です。



大塚君

細田 各国の青年たちと協力しあうことで、たくさんの友だちをつくりたいからです。

——出発に当たっての不安は?

菊地 ORに対する不安はありません。むしろ帰国後の就職問題に不安があります。

新保 サバイバル生活なんて想像もできませんから、非常に不安です。

大塚 ケガはしたくないなあ、と思っています。むしろ帰国後の将来が気がかりです。

——ORに対する家族、友人の反応はどうか?

菊地 家族は何もいません。友人はORの内容が理解できないらしくもの好き、という目で僕をみます。細田 好意的ですが、多少不安があるようです。

——参加するに当たっての抱負は?

菊地 大げさですが、この3ヵ月が自分の生き方の転機になれば、と思っています。

新保 無理しないで、自分のできる範囲で行動したいと思っています。

細田 自分の将来を見つめなおすこと、英語、スペイン語を上達させたいと思っています。

——これまでにどんな準備をしましたか?

菊地 英語、スペイン語の会話学校に通いました。また、体力の方も維持してきたつもりです。

大塚 一時、マラソンに取り組んだが続けることは難しいものです。できたら、OR事務局でスポーツ施設を指定して体力づくりをバックアップしてほしいと思いました。

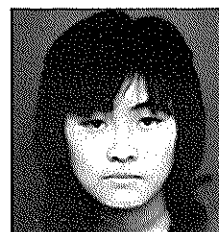
新保 スペイン語を少し勉強しまし

た。

——やり残したことは?

菊地 山登りを一度ちゃんとやっておくべきだったと思います。会話の方ももっと早くから始めるべきだったかも……。

新保 野外生活について勉強すべきだったかも知れませんが、とくに予防注射をやり残してしまったことが心残りです。



新保さん

——現地では何を主眼にしたい?

菊地 人との交流、冒険活動。

新保 まだ分りませんが、体力がそんなにあるとは思えませんので、ボランティア活動や調査に参加したいと思っています。

——帰国後の予定は?

菊地 就職活動です。

新保 大学生に戻ります。レポートが待っています。

——お金はいくらくらい持つていくつもりですか?

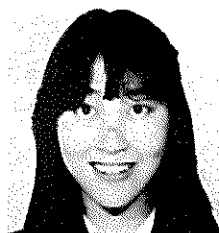
菊地 まだ決めていませんが、10万円弱のつもりです。

新保 トラベラーズ・チェックで20万円くらい。

——これから出発する人へのメッセージは?

新保 持ちものなんてギリギリまでなんとかなるものですが、予防注射だけは最低2ヶ月前に始めなくてはなりません。たとえば破傷風や狂犬病などは2回必要ですから。

細田 自分自身現地でどんなことをするのか分からないので、メッセージというものは考えられません。しかし、準備は万全に



細田さん

ということはいえると思います。

要項請求者数

応募者数

4,145名・1,113名

事務局が募集活動の集計発表

1985年次オペレーション・ローリー日本代表派遣青年募集は、5月30日をもって締め切られました。約70日間にわたる募集期間中、募集要項の請求者数は4,145名、うち応募総数は1,113名にのびりました。ORJC事務局では、このほど都道府県別、男女別などに分類した正確な集計を終わりましたので、正式発表します。

募集要項請求者

募集期間中、要項の送付を求めてきた人の総数は4,145名です。その都道府県別ベスト20は、つぎのとおりです。

- 1.....東京都 985名 (23.8%)
2.....大阪府 447名 (10.8%)
3.....神奈川県 354名 (8.5%)
4.....愛知県 303名 (7.3%)
5.....兵庫県 213名 (5.1%)
6.....千葉県 197名 (4.8%)
7.....埼玉県 187名 (4.5%)
8.....京都府 155名 (3.7%)
9.....福岡県 112名 (2.7%)
10.....北海道 96名 (2.3%)
11.....静岡県 84名 (2.0%)
11.....広島県 84名 (2.0%)
13.....岐阜県 63名 (1.5%)
14.....茨城県 60名 (1.4%)
15.....奈良県 57名 (1.4%)
16.....三重県 53名 (1.3%)
17.....宮城県 47名 (1.1%)
18.....長野県 44名 (1.1%)
19.....岡山県 43名 (1.0%)
20.....熊本県 41名 (1.0%)

( )内は請求総数に対する構成比
全体の傾向としては、大都市圏が上位を占めており、基本的には人口に比例した請求数となっています。

応募者

応募者総数は、昨年の実績の2倍以上の1,113名。男女比では、男性605名対女性508名。ほぼ予想どおりの比率となっています。都道府県別ベスト20は、以下のとおりです。

- 1.....東京都 267名 (24.0%)
2.....大阪府 126名 (11.3%)
3.....神奈川県 103名 (9.3%)
4.....愛知県 84名 (7.5%)
5.....兵庫県 67名 (5.1%)
6.....京都府 56名 (8.0%)
7.....埼玉県 53名 (4.8%)
8.....千葉県 50名 (4.5%)
9.....茨城県 26名 (2.3%)
10.....北海道 23名 (2.1%)
11.....静岡県 21名 (1.9%)
12.....福岡県 20名 (1.8%)
13.....三重県 19名 (1.7%)
14.....長野県 16名 (1.4%)
15.....滋賀県 15名 (1.3%)
15.....岡山県 15名 (1.3%)
17.....岐阜県 14名 (1.3%)

- 18.....鹿児島県 12名 (1.1%)
19.....宮城県 11名 (1.0%)
19.....奈良県 11名 (1.0%)
19.....山口県 11名 (1.0%)

( )内は応募総数に対する構成比
全体的には請求総数に比例していますが、募集要項請求数のベスト20に入っていない滋賀県、奈良県、山口県がベスト20に入っている点が注目されます。逆に、広島県、熊本県が請求数に比して、応募が少ないという結果になっています。

第1次合格者

都道府県別の第1次合格者は地図のとおりです。合計512名でその内訳は男性282名、女性230名です。





永井道雄氏



陳 舜臣氏



山口昌男氏



矢野 暢氏



並河萬里氏



中沢新一氏



筑紫哲也氏

## オペレーション・ローリーシンポジウム'85

# テーマは「文化を見る目」

オペレーション・ローリーへの日本代表青年派遣を記念して7月23日(火)「オペレーション・ローリーシンポジウム'85」が開催されます。会場は東京・プレスセンターホール。朝日新聞社とオペレーション・ローリー日本委員会の主催で、国際青年年事業推進会議、外務省、在日英国大使館が後援、日本電装株式会社が協

賛します。

昨年のシンポジウムは「異文化との出会い」をテーマに300名の参加で実施されましたが、今回のテーマは「文化を見る目」。日本代表のオペレーション・ローリーへの参加体験を紹介しながら、現代における文化を見る目の必要性について、各界の専門家に語り合ってもらおうとい

うものです。国際社会の中で果たすべき日本の役割がますます重要になってきている昨今、このシンポジウムには各方面から大きな関心が寄せられています。

なお、講師陣には次の方々が予定されています。

- 永井道雄氏(OR J C委員長)
- 陳舜臣氏(作家)
- 山口昌男氏(東京外語大教授)
- 矢野暢氏(京都大学教授)
- 並河萬里氏(写真家)
- 中沢新一氏(東京外語大助手)

また司会には筑紫哲也氏(朝日ジャーナル編集長)が予定されています。

これまで一度も海外経験のなかった私にとって、初の渡航は、ぜひとも他人のものとは異なった、絶対にまねしえないような独特のものにしたかった。私のそうした思いにとって、ORの「青年としてのフロンティア精神」という主旨は、まことに魅力あるものであった。日本人の間ではほとんど知られていない土地で、予想もつかないような生活を送ることができるというのだから。私はこの冒険を通じて、とにかく誰にも負けないすばらしい経験と友人関係をものにしてきたいと思った。

そして今、こうした思いが本当に実現されたことに対し、そうした機会を与えてくださった方々に対する多大なる感謝の念と、正直言ってまだ信じられないといった感が同居しているような状態である。

12月19日マイアミ到着から、ター



バハマのダイビング

### OR参加青年 リレー・レポート

#### 《第3回》



## 「個」を大切に 外国人の考え方

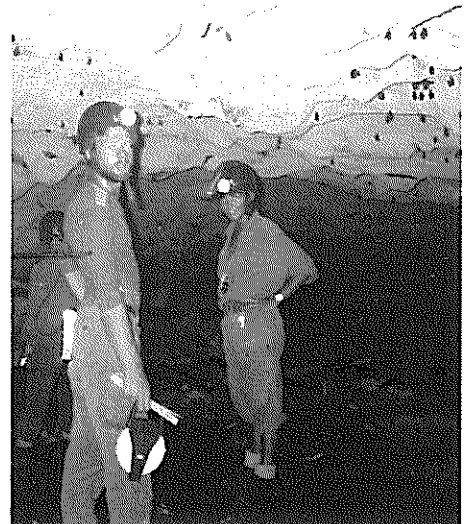
1984年次第3陣 戸崎 肇

クス&ケイコス諸島に至るまでは、わりとバタバタしていて、考える余裕すらあまりないような状況であった。しかし、その後は一つ一つのプロジェクトに対して十分な時間が与えられており、じっくりと取り組むことができた。私の所属したプロジェクトは、ダイビング・セイリング・ビルディングを各二週間単位で交代していくものであったが、私にとっては、やはり何といてもゼブ号のセイリングが最大のイベントであった。すばらしい自然と豪快な海の間人たちに囲まれて、私の心は、何かから真に解放されたように思う。

準備としてやっておいた方がよかったと思うことは、英語のヒアリングの勉強。話すより前にまず聞くことだどつくづく思った。それとジョークのセンスを少し身につけておく

べきだった。つらかったこととしては、シャワーがほとんどあびられなかったことと、サンドフライという蚊にとことんまで悩まされたことがあげられる。これさえなかったら、何の苦労もなかったのに…。

最後に、私が感じた外国人との間の相違点は、時間に対する感覚と、個人というものを非常に大切にす



コウモリの生態調査

という点である。ともに善悪の両面を持つものの、普段決して見ることのできない私自身の像を振り返って見るのに大変役立ったように思う。

これからは、この貴重な経験を生かしていくと同時に、また新たなフロンティアへと、自分を磨いていきたい。

## 日本代表派遣青年のページ

コスタリカ組  
ホンジュラス組

# 帰国後の感想語る

コスタリカから帰国した前橋宏美さん、ホンジュラスから帰国した勝間靖君、田中正信君が参加者帰国後アンケートに答えてくれました。

### Q1 当初のもくろみは?

前橋 語学力をつける、世界中に友人をつくる、遠くから日本を見つめる、将来についてじっくり考えるなどでした。

勝間 異った環境の中で、違った文化背景をもつ若者が互いに協力し合っ、ひとつのことをなすとげるこ



ホンジュラス・フェイズ

とでした。

田中 違った環境、さまざまな国々の人たちの中で、自分を再発見することでした。

### Q2 帰国後のORへの評価は?

前橋 コスタリカでは組織に不満を感じたが、成功のために今後も協力してゆきたいと思っています。

勝間 不満もあったが、このような機会が与えられたことを感謝しています。

田中 ロンドン本部と日本委員会とのさまざまなギャップにとまどいました。

### Q3 苦労したことは?

前橋 体力のなさ、英語のジョークが分らなかったこと。軍隊食のまずさです。

勝間 ジャングルの中で食糧事情が悪く、飢えたこと。

田中 少し無理して体調をこわしたことです。

### Q4 楽しかったことは?

前橋 ベンチャラー同士のふれあいや自然の中での人間らしい暮らし。現地人との交流も暖かでした。

勝間・田中 すばらしいベンチャラーたちにめぐり会えたこと。

Q5 異国人とのふれあいで感じたことは?

前橋 言葉や知識よりも誠実さや正直さが大切だと思いました。

勝間 文化の違いによるコミュニケーションの難しさです。

田中 インターナショナル・ベンチャラーにすばらしい人たちが多くいました。

Q6 日本人と外国人との大きな違いは?

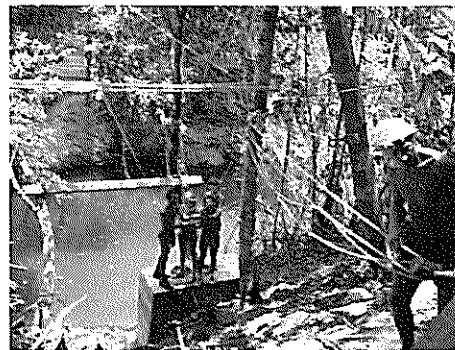
前橋 ボランティア精神。すべては個人主義とそれに根ざすボランティア精神の違いだと思いました。

勝間 一言では表現できないほどの違いを感じました。

田中 香港からのベンチャラーには日本人との共通点をたくさん発見しました。しかし、オマーンやイギリスの人たちとは考え方の違いを強く感じました。

Q7 参加したフェイズで最も印象に残ったことは?

前橋 私が食糧補給部隊に参加し、フラフラになりながらキャンプにた



コスタリカ・フェイズ

どりついたとき、みんなが「おめでとう」といってともに喜んでくれたこと、満月の夜の水球ゲーム、大きなビーチいっばいにひろがった真赤な夕陽、カリブ海でサメに出くわしたことなど、きりがありません。

勝間 小人数グループでの10日間程度のチャレンジングなプロジェクトです。

田中 一番最後にやった「いかだレース」。香港からの2人のベンチャラーはすばらしい人たちでした。



Operation  
Raleigh

DENSO

オペレーション・ローリー&日本電装

## 日本電装に関心示す 海外ベンチャラーたち

コスタリカ、ホンジュラスフェイズから帰ってきた参加青年たちの話によると、外国ベンチャラーたちの日本電装への関心はかなり高いようです。Tシャツとかハッピーへの興味だけではなく、日本から派遣された青年たちへの保険などに関する日本電装の配慮についても評価が高く、「スーパー・ビッグ」のイメージをもち、大きな期待を寄せているということです。日本電装に関する質問も多く、どんな企業かをよく尋ねられたようです。また、漢字に対する関心が高く、ハッピーやTシャツも漢字で表現してあったほうがよかったという意見もありました。

## パナマ・フェイズ便り

パナマフェイズに参加している岸田直子さんからの便りによると、5月下旬には約17日間のジャングルパトロールを終え、6月中旬まで川村豊君と一緒にダイビングに取り組んでいたそうです。この間、平野裕加里さんはヤビザの学校の復興作業、筒井正幸君はアクラというところで海ガメの産卵観察に参加していたということです。

岸田さんは、パナマフェイズ中、最も過酷なパーティーに参加していたもようで、日射病にかかって意識を失なったり、渡河中におぼれそうになったりしながらも、ただひとりの女性メンバーとして、がんばったということです。

現地の子供たちとも親しくなり、ボートで村を離れるとき、子供たちが別れを惜しんで海岸線を走りながら「アディオス!ナキ!」と叫ぶさまは、まるで「二十四の瞳」のようなシーンだったということです。

(ナキ：岸田さんの現地での愛称)